幼稚園日記！

fumia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幼稚園日記！

【Ｎコード】
Ｎ３９１５Ｙ

【作者名】
ｆｕｍｉａ

【あらすじ】
聖リリカル女学院付属幼稚舎の入園手続きも入園式も無事に終え、桜が本格的に通園を始める日がとうとう訪れた。初めての集団行動、学習規則、上手く馴染めるだろうかという母親の薫の不安も余所に、桜は意外と順調に幼稚園ライフをスタートする。そんな中、最初の年少さんの保護者会で、専業主婦って暇そう＋年中さんの保護者会の議長の麗子と特に親しいという理由から、薫は他の母親から年少さんの議長として祀り上げられて……。

第一話：初めての通園日

＞＞薫
「桜、早く来なさい。」
「はい！ママ！」

幼稚舎の制服を身に付け、赤い通学鞄を左肩に掛けた娘の手を引き、僕は玄関から外の廊下へ出て、戸締りをきちんと確かめる。

「じゃあ、行くわよ！」
「うん！」

桜と一緒にエレベーターでマンションの1階に降りると、僕は彼女を胸に抱き上げた。そして、ロビーを突っ切って気持ち良い位に澄み切った群青色の大空の下に飛び出し、小走りで駐車場へ向う。

そして、和樹の黒いアルファードの右側に駐車した僕のＵＣ１型のインスパイアの前期モデルの左側の後部座席に桜を乗せてシートベルトで固定し、自分も運転席に乗り込んでエンジンを始動させた。

僕の車にはどの車にも車内に、ＥＴＣ、ルームランプに白色ＬＥＤランプ、カーナビと一体型の社外品のオーディオと、ダッシュボードのセンターパネルの上に左から電動の油圧計・油温計・水温計が並んだ三連メーターと乗員変更なしのタイプの６点式のロールバーが取り付けられている。ロールバーを付けた所為で車両自体は事故車扱いとなって価値が目減りしてしまったが、元々前世紀末頃に造られた、製造されてから優に３０年から４０年位たった廃車や事故車をレストアした、小さな傷と凹みだらけのボロボロの車ばかりで価値など元々無いに等しいから、僕自身は特に気にはしていない。

さらにそのロールバーの助手席と運転席にサイドバーも増設し、ロールバーの運転席側のＡピラーの所にシートベルトカッター付きの特殊ハンマー、助手席下のダッシュボードの所に、発炎筒と並べてスプレー缶タイプの消火器を常備している。

そして全ての窓ガラスに防犯性能も備えた透過率７０％の黒いガラスフィルムを貼って車内の様子が見えにくくし、２枚ある字発光式のナンバープレートの内、前にあるプレートの電力を遮断し、赤外線カメラに反応するとストロボを焚いてナンバーが読み取られる事を防ぐ機械を取り着けている。

足回りとエンジン周りの改造に力を入れ、後ろのマフラーはステレンスの左右二本出しの直管低音マフラーに取り替え、ホイールを２０インチのアルミに替え、ブレーキも４輪ディスク化して、大口径のディスクに４ピストンの対向ピストンキャリパーを組み込んでレーシングカーのそれの様に仕上げ、サスペンションをエアサスに替えて最低車高を１０ｃｍまで落として、サイドテールとフロント・リアエアロを取り付けてフルエアロ化している。

僕の車には全てフォグランプが付いている。ヘッドライトと一体型になっている古い型ならそのままにして、フロントバンパーのエアロ部分のフォグ部分にそのままハザードランプを持ってくる。ハザードとヘッドランプが同じレンズ内にあって、フォグランプがバンパーに取り付けられた比較的新しい車ならそのままフォグランプをエアロに組み込む。そして、Ｙ３３や１５０クラウンの様にフロントバンパーにハザードとフォグが並んでいる車の場合はエアロにはフォグランプだけ取り付けて、ハザードランプはスモールランプと共にＬＥＤ化して一体化させ、白いＬＥＤで車幅灯を点灯させ、黄色いＬＥＤでウインカーを明滅させる。そもそもフォグランプが付いていない車は、ＧＴ－Ｒ３４のようにエアロを取り付けるときハザードの下に増設するか、エアロにはフォグランプだけにしてスモールランプにハザードも持ってくるような細工を施す。そしてＧＴウィングを着けたＧＴ－Ｒ以外の車両にはトランクに赤いＬＥＤ

の細長いハイマウントストップランプが付いた小型のリアウィングを取り付けている。そして汚れが目立ちにくいという理由で全部同じようなシルバーメタリックで車体が塗装されている。
　エンジンはターボならツインターボにして、必要ならボアアップや載せ替えても３Ｌ６気筒、ＮＡなら３．５Ｌ以上の６気筒エンジンにしてスーパーチャージャーを着けて５００馬力程度は出せるようにし、勿論ミッションも強化ＡＴに交換し、リミッターも外し、２００ｋｍ／ｈ以上は余裕で出せる位にはチューンアップしている。
　要するに走り屋仕様の、ドリ車仕立のＶＩＰカーが僕の愛車達…という訳である。

　話を戻そう。
　さて今日は、前日に行われた入園式を除けば、桜が初めて聖リリカル女学院・幼稚舎へ初めて通園する、ある意味記念すべき日だ。
　幼稚舎からは、２３区内や他の都内各所に住む子供達の為に通園バスを走らせているらしいが、僕は自分が車を運転できる事と我が家が近い所にある事から、バスは利用せずに家から直接桜を送り迎えする事に決めていた。

　幼稚園は、麗奈ちゃんとか聖羅ちゃんとか、同じ年頃のお友達が沢山いる楽しい所だ、と話した事が功を奏したのか、ハンドルを握る僕の後ろで、桜は膝の上に赤い通園バッグを抱き、ウキウキしながら鼻歌を歌っている。
　ただ、喜んでいるのは幼稚園にいけるからだけではないらしい。最近になって思い至ったのだが、どうやら桜は自動車でドライブするのを心の底から楽しんでいるようだ。やはり僕の子供だという事か……。
　それとも、単に母親の僕と一緒に居られるから楽しめている、と考えるのは親の自意識過剰だろうか？

兎も角、車を飛ばせばたったの２０分もない道程だけれども、僕は桜と談笑しつつ幼稚舎へ向かって車を走らせた。

幼稚舎の正門を通り抜け、敷地の中へ乗り込むと、園舎のエントランスの正面に僕は車を停めて降車した。そして右側後ろのドアを開け、シートベルトを外して桜を地面に下ろすと、車を施錠して娘の手を引いて目の前の建物に向かって歩き出した。

園舎の玄関の中へ入ると、もう通園バスが到着していたのか、桜と同じ深緑色の、胸の右側、丁度校章が刺繍された胸ポケットと対になる場所に花や昆虫等の形を模した可愛い名札を付けた制服を着た子供達が、何人かの先生達の間をうろちょろして騒いでいる。

そんな中、僕は濃い紫色のトレーナーに紺色のミニスカートを履いて、その上から薄いベージュのエプロンを着たショートヘアの年若い女の先生を見掛けた僕は、

「佐々木先生！」

と、彼女に向かって声を掛けた。

此方に気付いてパタパタとスリッパを鳴らしながら走ってきたこの女性の名は、佐々木……確か名前は希美とか言ったかしら？今年度、桜が所属する年少さんの『ゆり組』の担任を務める先生である。

佐々木先生は僕と桜の前に立つと軽く会釈をし、挨拶をした。

「お早うございます。」

「お早うございます。」

「先生！おはよう、ございます！」

「はい、桜ちゃん、おはよう！今日から一緒にがんばろうね！」

「はい！」

「先生、今日から桜の事、どうぞ宜しくお願い致します。」

そう、僕は深く頭を下げて娘を託した。

「分かりました。どうか、わたし達に御息女の事をお任せ下さい。」

先生から胸を張ってそう言われると、親としては心強い。
「それでは、下園時間になりましたら迎えに参りますので……。失礼します。」
「はい、畏まりました。お待ちしております。」

「桜！先生の言う事は、ママの言う事と同じようにちゃんと聞いて、お友達と仲良くして良い子で過ごすのよ！」
別れ際、僕は娘にきちんと言い聞かせた。
「うん、桜、良い子にする！」
「よし、良い子良い子。」
僕が頭を撫ぜてやると、桜は目を細めてニコッと笑った。が、
「じゃあ、ママ、幼稚園が終わった頃に迎えに来るからね。バイバイ。」
と、車へ向かって踵を返そうとすると、途端に彼女の態度は激変した。
「え？あれっ？ママ！ママ！何処に行くの？待ってよ――！桜、置いて行かないで！ママ！ママ――！」
狂ったように手足をばたつかせ、大粒の涙をボロボロと流して泣き喚きながら、桜は僕の後ろから抱きつくように僕のスカートの裾を握って執拗に引っ張った。

「こらっ！たった今『良い子にする』ってママと約束したでしょう？」
僕は溜息を吐き、後ろへ体を向けると腰を落としてしゃがみ込み、桜と真正面から向かい合った。
そうして娘の肩を優しく摩ってどうにかして宥めようと試行錯誤してみたものの、効果がないのか彼女の嗚咽は止まらない。
「桜、いい子にするから！いい子にするから！だから、ママ！行かないで！行っちゃダメ――！」

単純に、母親と離れ離れになるのが嫌で嫌でしょうがないらしい。勿論そうして母親を求める仕草は愛らしい物があるし、親としては凄く嬉しい事には違いないが、何とも歯がゆい。何せ、通園バスを利用せずに保護者や介添人が直接送迎しているのは、我が家だけではない。全体の割合としてはずっと少数派かもしれないが、引っ切り無しに表に車が停まっては、母親とか父親とか、時にメイドや運転手といった使用人が幼稚舎に子供を預けて去って行く。無論中には桜のように泣き始める子だっていない訳では決して無いが、大多数はそのまま素直に別れ、他の園児達と合流してそれぞれの教室へと消えて行く。そうした様をまざまざと見せつけられていると、やはり居心地が悪くて恥ずかしく感じる。

でも、やっぱり一定数こういうケースは毎度存在するのか、それとも幼児教育のプロとして元から弁えているのか、

「ねえ、桜ちゃん。桜ちゃんのお母さんはね、大事な用事があってどうしても行かなくちゃいけないんだって。……少しの間寂しくなっちゃうかもしれないけれど……。ほら、お友達も沢山いるし、先生も居るから、寂しくなんかないよ。ね、先生とあっちで一緒に遊ぼう。」

と、手馴れた感じで佐々木先生が助け舟を出してくれた。だがしかし……。

「やだ――！ママと一緒じゃなくちゃ、や――――！」

全くもって効果なし。気の所為か、寧ろ火に油を注いでしまったようにも感じられる。

「すみません、ウチの娘が……。」

「いえいえ、初めての通園ですし。年少さんのような小さな子だと、こういう事はよくある事ですから。」

仕方ないですよ、子供なのだから。そう優しく声を掛けられるのが却って辛い。

途方に暮れて、どうしたものかと思案していると、また表に車が停まった音が聞こえた。
余程上流階級のお嬢さんが乗ってきたのか、
「ここでいいわ。ご苦労様、柏木！」
「それではいってらっしゃいませ。お嬢様。」
と、少し仰々しいませた幼女と、その侍女かメイドらしい若い女性の声の会話が耳に入ってきた。
それだけだとさっきからも何度か見聞きした遣り取りだが、突然その少女が、
「あら、桜、と薫小母様、じゃない！お～～い！」
と、何故か僕と桜の名を叫びながらトテトテと此方へ走り寄って来た。

振り返ると、それは麗奈ちゃんだった。
「あ、お姉ちゃま……。」
知っている顔に出会ったからか、急に桜が泣き止んだ。
「ごきげんよう、桜。今日から、一緒に幼稚園で過ごせますわね。」
「……。」
「楽しみですわ。さ、行きましょう。」
そう言って麗奈ちゃんは桜の制服の上着の左袖を引っ張ったが、
「でも……。ママも一緒じゃないと、やだぁ！」
と、桜は首を横に振って頑として動こうとしなかった。

「でも桜、幼稚園ではお母様と一緒にいる事は、出来ないのよ。誰も、お母様と一緒に居ないでしょう？」
「……。」
周りの園児達を見回して、誰も母親に付き添って貰っている子が居ないという事実を目の当たりにして恥ずかしくなったのか、桜は急に沈黙して下を向いた。

「……わかった。」
突然顔を正面へ上げてはっきりとそう口にすると、桜は麗奈ちゃんの左手を自分の右手でしっかりと握りしめ、僕に背を向けた。
「じゃあ、ママ、もう行くから。終わった頃に絶対迎えに行くからね！麗奈ちゃん！桜の事、お願いね！」
「任して下さい！小母様！さあ、桜、行きましょう。こっちよ。」

先生と麗奈ちゃんに導かれて靴箱へ向かい、中から出した白い上履きにきちんと履き替えて校舎の廊下の奥へと去って行く桜に声を掛け、車へ引き返す。
ああは言っても未練がましくチラチラと僕の方を振り返る桜の様子に若干の不安を覚えたが、歳の割にしっかり者の麗奈ちゃんもいるし、きっと大丈夫だろう。無理矢理にでもそう思い込まないと娘の事が心配で辛かった。

家に帰っても、やはり懸念は拭い去れない。
ちゃんと新しく知り合っただろうお友達と仲良く過ごせているだろうか？多分無いだろうし、そうである事を切に祈るが、我儘を言って先生達を困らしていないだろうか？それとも大ポカをして嘲笑されてないだろうか……？気に病んだところでどうしようもない事は百も承知だが、嫌でも気になって家事にあまり身が入らなかった。

簡単な昼食を拵えて食している間も、あの娘がちゃんと僕が作った弁当を食べているか？弁当の出来が地味過ぎたり、逆に派手過ぎたりして、他の母親達が子供に持たせた物と比べて変に浮いてないだろうか？そんな些細な事が逐一心の中に思い浮かんで、悩ましいったらありゃしなかった。

ただ、買い物へ行く時に限ってどうしてか、僕は桜の事から精神的に解放されたような気がした。

単純に、今日の夕飯や、明日の朝食や夫と娘のお弁当の献立を考えたり、頭の中で冷蔵庫の中の食品をリストアップして必要な物を整理したりと、色々と画策する事が多過ぎて子供を慮るところまで手が回らないだけかもしれない。もしくは、本当に心が開放的になっていたのかもしれない。何故なら、今までは桜を外へ連れ回す事に気が引けて、何日かに一度の機会に大量に纏め買いするしかなかったが、これからは必要な分を必要な分だけ毎日小分けして購入する事が可能だからだ。

タイムセール時を狙わなければ、子供が居ない内に面倒な外の用事は全て済ませる事が出来る。たったそれだけの細やかな事柄でも、子供という縛りとか柵から解き放たれて心の安息を得る事が出来る。

これから、もっと時が過ぎて、あの娘が小学校、中学校と進んで、どんどん手が掛からなくなって僕から離れるようになれば、こんな風に安堵出来る時間が比例して増えていくのだろうか？何時か、その時が訪れたら、僕はどんな感慨に浸るのだろう……。心の底から嬉しいと思うのか、それともほんの少しでも寂しさを心に内在させるのか……。願わくは、後者でありたいと切に思う。

買い物から帰ると、結構な時間が経過していたのか、そろそろ桜を迎えに行って上げないといけない時刻が目前まで迫っていた。僕は冷蔵庫にしまわなければいけない食品だけ手際よく片付け、外に出られる位の最低限の化粧をし、服を着替え、下に降りてＧＴＯのエンジンに換装した２代目後期のディアマンテに乗り込むと、幼稚舎に向かって出発した。

朝に来たのと同じ様に、園庭の一角に車を停めると、僕は園舎の玄関に向かって歩き出した。

もう既に幼稚舎の通園バスは園児達を乗せて出立した後なのか、幼稚舎の建物の中は今朝と違って閑散としている。それでもたまに、

玄関から見える廊下に並んだ教室のドアの隙間から、子供達が遊んだり話したりする声や先生の声が漏れ聞こえてくる。まだ保護者の迎えを待つ子がかなり残っている事が窺い知れた。

土間から一段上がったエントランス部分の、土足厳禁の廊下に繋がる所に折り畳み式の長机とパイプ椅子が置かれ、そこに中肉中背でショートヘアの、丸いレンズの眼鏡を掛けてやや濁ったピンク色のトレーナーと青いジーンズのパンツを着た中年の女性の職員がどことなく退屈そうな面持ちで腰を掛けていた。

僕は、その机の前に立つと、

「あの……。」

とその女性に声を掛けた。

「すみません。」

「はい？」

女史は顔を上げ、僕の方をじっと見上げ、静かに口を開いた。

「何でしょう？」

「年少のゆり組の富士之宮　桜の母でございます。娘を迎えに来たので、担任の佐々木先生にお伝い願えないでしょうか？」

「少々お待ち下さい。」

歳の所為だろうか、少し掠れた声で淡々とそう言うと、その女職員は静かに立ち上がり、廊下の奥へと歩いて行く。

そして、ある教室の前で立ち止まると、その部屋の扉を開け、中に向かって大声を発した。

「佐々木先生！佐々木先生！富士之宮　桜ちゃんのお母様がお迎えに来ていらっしゃるから、桜ちゃんを連れて来て上げて！」

言うだけ言ってしまうと、また職員は此方に向かってすたすたと早歩きで戻って来た。そして椅子に腰を下ろしつつ、

「失礼致しますが、もう暫くお待ち下さい。今、担任の先生が御息

女を連れて参りますから。」
と、やけに恭しく愛想笑いをする。どう考えても僕より相手の方が年上なので、はっきり言ってむず痒く感じて却って肩身が狭い思いがする。まあ、俗に言うセレブが多い園だから、敢えて職員も丁重な対応をしているのだろう。

しかし、それにしても少し遅くないか、桜を呼び出して貰ってからもう5分も過ぎようとしている。
不穏な物を感じてドキドキしながら、永遠とも感じた時間を過ごして待っていると、教室から佐々木先生に手を引かれた桜が現れた。

佐々木先生に礼をし、お気に入りの小さな桃色のスニーカーに履き替えた桜の手を握って幼稚舎の建物から外に出る。
少し赤く染まった白い太陽の光が当たる場所まで歩いてきた途端、桜が僕に向かって不満気にぽつりと呟いた。
「ママ、もっと遅くても、良かったのに……。」
「あら、ぞんざいな言い草ね。今朝、ママと離れたくないって泣いていた子は誰だっけ？」
「む――――っ！」
僕がからかうと、桜は怒ったように口を真一文字に結んだ。相変わらず仕草が愛らしいので、僕の口元も思わず緩む。

「そう言えば、さっきは凄く遅かったようだけれど、何をしていたの？」
車を解錠して左の後部座席のドアを開け、桜を抱き上げてシートの上に座らせつつ、僕は彼女にそんな事を訊ねた。
「あのね、桜ね、聖羅ちゃんやカリンちゃん達とね、おままごとしていたの！」
「そうなの。それは良かったわね。」
明るく元気良く答えた桜を見て、嬉しさの余り顔が綻びる。この

娘なりに上手く友達を作る事が出来たと知って安心した僕は、
「さあ、ドアを閉めるから手を引っ込みなさい。」
と子供に注意した。
「は――い！」

ドアを閉めて運転席に回り込みエンジンを掛ける。するとまた桜が僕に話し掛けてきた。
「でも、ママ。」
「なあに？」
「ママが来るのが、もっと遅かったら、もっと遊べたんだからね！」
偉そうに威張った桜のこの言葉を耳にして、僕は不覚にも吹き出してしまった。勿論、彼女の機嫌が斜めになったのは言うまでもない。
「む――――！何がおかしいの？」
「ふふっ！ごめんね。もしかしたらママが早く迎えに来なくて泣いているんじゃないかって心配だったものだから。」
「桜、泣かなかったよ？」
「ええ、そうね……。だからママ、安心したわ。……それで、幼稚園はどうだった？」
「うん！えっとね！あのね……！」

桜は堰を切ったようにお喋りを始めた。幼稚園でしたお遊戯の事、玩具で遊んだ事、麗奈ちゃんとも遊んだ事、先程出てきた少女達の他にも友達が何人か出来た事……。色んな話をたどたどしく話したが、全てに共通して解った事は、結局僕の不安は杞憂に終わった、と云う事だけだった。

「そう言えば、ママ！お遊戯でね……。」
「はいはい、帰ってからゆっくり聞くからね。そろそろ帰りましょう。」

「うん！」

僕は、ブレーキを踏んでシフトをＰからＤへチェンジすると、ゆっくりとアクセルを踏み込んで車を家に向かって発進させた。

第二話：保護者会会長就任

＞＞薫

桜が本格的に幼稚園に通い始めて１週間が経とうとしていた。

聖リリカル女学院には、都内……特に２３区内や周辺の湾岸地区に居を構える家庭の子供達が多い為か、幼稚舎のお迎えもかなり遅い時間に来る保護者が比較的沢山いるように感じられる。

実際、桜に文句を言われてから２０分程迎えに行くのを遅らせると、丁度自分と同じように自家用車で園に来た他の園児の母親と鉢合わせ、世間話がてら情報交換する機会がぐっと増え、ママ友と云うか、その中で親しくなる人も出来た。

さて、その日の夕方、僕はいつもの通り幼稚舎の建物の前に、３．５Ｌにボアアップした自分の前期型の３０系のウィンダムを停車してエンジンを停め、車から降りてエントランスの中へと入った。

「ママ――――！」

佐々木先生に手を引かれ、此方に向かって元気良く手を振りながら桜が現れたので、僕も彼女に向かって手を振り返した。

「先生。今日もありがとうございました。」

「いえ、いえ、仕事ですから……。……それじゃあ、桜ちゃん。さようなら。また明日ね。」

「は～～～～い！先生、さようなら♪」

「それでは失礼致します。」

桜と共に佐々木先生にお礼と別れの挨拶をし、幼稚舎を後にする。

「今日も、幼稚園楽しかった？」

「うん！とっても！」

「そう、良かったわね。」

帰途の車中、車を運転しつつ娘と幼稚舎であった出来事について会話を交わす。幼稚園に通い始めてから、毎日何がしらの新しい発見や楽しみがあるのか、桜は瞳をキラキラと輝かせながら興奮し、僕に向かってその驚きや疑問を一生懸命説明する。そして今日も、そんな取り留めのない会話が連綿と続く筈だった。

「あっ！そうだ！ねえ、ママ！」
「……なあに？桜。」
「セックスって、なあに？」
「……？？！！」

仰天したあまり、僕は道路のど真ん中で急ブレーキを掛けてしまった。
「キャ――――ッ！」
と、後ろで桜が叫び、パ――――――――ン！と後続車から盛大にクラクションを鳴らされ、
「ごめんなさい！」
とタジタジになりつつも、僕はハザードを焚いて一先ず車を路肩に停めた。

勿論、親として子供が歳にそぐわない下劣な言葉を口にした事を、親として看過する事は決して出来ない。僕は桜に詰め寄った。
「桜、何時、何処でそんな言葉を覚えたの？」
桜は今にも泣きそうにウルウルと目に涙を滲ませると、しどろもどろに話し始めた。

＞＞
お弁当の時間が終わり、昼休みがやって来た幼稚舎の昼下がり、桜と聖羅と華凛の3人は、園内に設置された玩具箱から出した人形で遊びながら、ガールズトークをしていた。

肩まで伸ばしたストレートのセミロングの、茶色が少し混じった黒髪で愛らしい顔立ちをした、何処かおっとりとした雰囲気を漂わせる桜。母親譲りの綺麗な長い金髪をツインテールにした、やや目立つ目付きの険しさが彼女のクールな性格を容易に連想させる聖羅。セミロングの黒髪をツインテールにするという、まるで桜と聖羅のそれを足して2で割ったような髪型をした、兎に角好奇心旺盛な元気っ子の華凛。外見も性格もバラバラな3人だが、聖羅の母親が桜と華凛の双方の母親と知り合いだったという、至極単純な縁故で彼女達は仲良く連んでいた。

まあ、小さい頃の幼馴染みの成り立ちなんてそんな物である。

女の子と云うものは、男の子と違って背伸びをしがち、何が何でも大人になろう、同じ立ち位置に立とうとし、大人と対抗しつつもそれに強烈に憧れている者である。それは、たとえ幼稚園児でも同じ。正の部分と負の部分どころかそれが実際どういうものか理解していなくても、身近にいる大人がやっている事、化粧や恋愛や仕事や家庭といった物に熱烈な興味を持っている。同じ大人に対して憧れを抱いていても、自分の手では到底届かないであろう遠い物、機械や科学やプロスポーツへ目が行く男児とはある意味対照的な存在である。

そして彼女等も例外ではなく、同じクラスに居る男の子の誰某が格好良いとか、母親がしている化粧のあれそれがしたいとか、そんな他愛もない雑談をグダグダと繰り広げていた。

この時も、彼女等は特に出発点も到着点も存在しない気ままな談笑を徒然と続けていたが、偶然華凛が発した一言によって、急におかしな事になってしまった。

「昨日ね、お父さん、お母さんが、セックスしているの、見たの！」

「……？？」

無論、どちらの両親も常識的な方だった為にそういう方面の知識など皆無だった桜と聖羅は、二人揃って沈黙し、首を傾げた。華凛が口にした『セックス』という単語の意味について小さな子供なりに精一杯考える。

どうも華凛は、彼女の両親がベッドの上で戯れているのを『たまたま』目撃し。どういう訳だか知らぬが彼女の母親も、プロレスごっこ等と適当に誤魔化して於けば済むものを、開けっ広げに事実を暴露したらしい。

「お母さん、言ってたよ！セックスって、気持ちいいんだって！」

何が何やらさっぱり理解出来ないが、『大人がやっている事』そして『何かしらの快感が伴う行為』、たったそれだけでも幼い少女らの無尽蔵な好奇心を駆り立てるのには十分過ぎる事だった。

「わたしのお母様と、お父様もやっているのかしら？」

「絶対やっている、ってお母さんが言ってた！」

「桜のパパとママも？」

「絶対やっている、ってお母さんが言ってた！」

「本当に？」

「絶対やっている、ってお母さんが言ってた！」

「本当かしら？」

「絶対やっている！ってお母さんが言ってた！！嘘だと思うなら、聖羅ちゃんも、桜ちゃんも、お母さんに、セックスって、なあに？って聞いてみればいいのよ！」

「じゃあ、桜、ママに訊いてみる！」

＞＞薫

……という顛末があったらしい。

純粋に無邪気な好奇心から訊いてみたから怒られるとは毛頭も思って居なかったのだろう。桜は完全に萎縮したのか、項垂れている。

まあ確かに、そう云う言葉を使うな、と強い言葉で言い過ぎたかもしれない。普段我を忘れる程取り乱して怒ると云う事が滅多にないから、そう意味でも桜のショックは大きかったろう。

そうは言っても、である。やはり『セックス』という品の無い言葉を、桜のような幼子が覚えたり日常的に口にしたりするのは如何なものかと思う。そりゃあ、小さな頃は大人の世界で禁忌とされている単語を物珍しさから連呼する、と云う事がままあるが、聖リリカル女学院の幼稚舎なら、常識と教養を持った中・上流階級の、そういう子供の言葉遣いにも気を遣っている親御さんが多いから、娘がそう云う言葉を覚えて帰って来る事もまあるまいと考えていただけに、僕は親としては少なからず落胆した。

しかし、カリンちゃんだっけ？その女の子の母親も大概なものだ。夜の共同作業を子供に見られてしまった事は仕方ないとしても、誤魔化し様はあっただろう。態々赤裸々な事実を子供に吹聴する必然性はないし、仮に在ったとしても、外では絶対にそういう事を言ってはいけない、と釘を刺す事位は親として、否社会人として当然すべき事だったろう。こういう最低限な躾すら出来ていない可能性のある家庭の子供と、ウチの娘を手放しで突き合わせていて本当にいいのだろうか？と疑問を呈せざるを得ない。

されど、せっかく出来た友達の縁を切り離すのも酷だとも思う。そもそも、リンカちゃんのお母さんとやらは聖華と親しい間柄らしいし、一概に無碍にする事も出来ない。

「まあ、いいわ。今度、そのカリンちゃんがそういう事を言ったら。お外で、そういう事をあまり言っちゃいけないよ、って桜のママが言っていたよ、って言いなさい。」

「うん、わかった。……？」

取り敢えず桜にはそう言い含めておいたが、桜は頷きつつも僕が言った事をよく解っていないのか、少しだけ小首を傾げた。

数日後、夕刻の事である。
Ｙ３１シーマで幼稚舎に桜を迎えに行くと、龍宮司家のマイバッハが園の敷地内に停まっているのが目に入った。

エントランスの中に入ると、やはりそこに聖華が立っていた。幼稚園の娘のお迎えにしては少し遅めの時間のように感じるが、その後すぐに初等部へ上の息子を迎えに行く都合上、この位の時間に拾うのが一番良いそうである。

子供達が中々出て来ないので、母親同士世間話をする序でに、華凛ちゃんの母親、長谷川さんの事について根掘り葉掘り訊いてみた。
「珍しいですわね、薫。あなたがそんなに他人の詮索をしようとなさるなんて……。」
聖華は少し目を丸くしたが、先日桜と交わした会話の顛末を話すと、
「ああ……。」
と嘆息しつつもこう言った。
「あの方はそういう所があるから……。」
「それにしたって、子供にそういう事をオブラートに包まずに教えるなんてどうかと思いますわ。あんな言葉がウチの桜から飛び出してくるなんて夢にも思いませんでしたもの。一体、何処の何方なのかしら？」
僕が憤慨すると、聖華は思いもよらぬ事を口にした。
「あら、あなたもよくご存知の方ですわよ。」

え？誰？
そう吃驚した刹那、僕は聖華と共に後ろから誰かに抱き寄せられた。
「ねえ、ねえ。何の話をしているの？わたしも混ぜてよ！」

聞き覚えのある弾んだ声、首から左肩、そして胸へと回された見覚えのある手。……間違いない。僕はそう確信しながら、首を右後ろに向けて抱き着いてきた人物の方へ振り返った。

「やあ、薫ちゃん。お久しぶりね！」

僕達から離れ、右手を軽く上げて茶目っ気たっぷりに挨拶したその人は、凛様だった。もう麗子お姉様と同じ３２歳だから、最後に会った時と比べると少し老けた感があるが、雰囲気は学生時代と一寸も違わない彼女がそこにいた。

何かもう、納得のあまり僕は彼女に対して憤る気も失せてしまった。

「いやあ、でも偶然ってあるものよね！同時期に学生会にいた８人の内、３人も娘が同じ幼稚園のクラスにいるだなんて！確か一つ上には麗子の娘もいるでしょう？」

「ええ。居られますわ。」

「だったら麗子も含めたら、同じ幼稚園に４人も集っている訳だわよね？何か運命を感じない？」

相変わらずサバサバとした性格は変わっていないのか、子供達が退屈そうな顔をしてそれぞれの母親の足に纏わり付いているにも関わらず、凛様は機関銃のように喋る、喋る。結局、

「それじゃあ、薫ちゃん、聖華も、また機会があれば一緒にお茶でもしましょう！」

と締めて別れるまで、３０分近くも彼女は言葉を口から出し続けた。

ただ、凛様に会って、１５年前、あの学生会室で過ごした８人のその後の様子が断片的に知れたのは、あの頃を懐かしく回想する事と、皆が達者に暮らしている様子を窺い知れた事はとても嬉しかった。その代わり、１５年という月日の流れの長さも思い偲ばれて感傷に浸ってしまったけれど……。

次の日、桜を迎えに行くと、娘が何か白いＢ５のプリントを手に

持ちながら佐々木先生と共に出てきた。
「あら、その紙、どうしたの？」
と桜に訊くと、
「あのね、ママ。先生がね、これ、ママに渡して、って！」
と彼女はそれを持っていた手を上に伸ばすと僕に差し出した。
プリントには、保護者の皆様へ、という煽り文と共に『第一回保護者会のお知らせ』という表題が掲げられている。
「今度保護者会の役員を決める為に父兄の皆様に集まって頂こうと思いまして……。」
と佐々木先生が補足した。
「はあ、左様ですか。分かりました。都合を付けますわ。それでは失礼致します。……さあ、桜。行きましょう。」
僕は先生に向かって一礼すると桜の手を引いて歩き出した。

保護者会の日がやって来た。久々に紺色のスカートタイプのスーツを着た所為か、身体が芯から引き締まる気がする。僕は深呼吸をすると、ＲＢ２５ＤＥＴＴを３Ｌにボアアップした後期型のＣ３５ローレルのメダリストの運転席から外へ降り立った。

日曜日で会社が休みの為に和樹が家に居るから、彼に桜の面倒を半ば強制的に見させている。午前中に終わってお昼までには帰れる筈だから、普段父親らしい事をやっていない分今日位娘の相手をしてくれたって構わないだろう。

幼稚舎の園庭には、既に数十台の車が所狭しに停められていた。もう結構な人数の父兄が集合しているらしかった。

幼稚舎の園舎の中に入り、今回の保護者会の会場として用意された３０畳程度の広さの会議室に通されると、大学の講義室のように、入り口からすぐ右の壁際に設置された移動式のホワイトボードと相

対する感じで、綺麗に3列縦隊で21脚並べられた白い折畳み式の長机と、その机1脚当たり3脚ずつ置かれた青いパイプ椅子が見え、そこに合わせて50人程度の保護者が腰を下ろしていた。付き添いで来たらしい3人の男性を除けば全員女性である。

しかしまあ、ここまで色んな年齢の女が揃ったものだ、とその光景を一望した途端僕は心の中で感嘆した。

はっきり言って、自分と同世代、具体的に言えば自分の年齢の±5歳程度で大凡固まるだろう、と予想していた。が、実際には、勿論20代と思しき若い娘も居るには居るが、どう考えても30代後半か40代、下手すると40代末から50代の初めにも見える年配のおば様方が意外と多い。尤も、幼稚園の保護者会だから休日でも忙しい父母の代役として馳せ参じたお祖母ちゃんの可能性もある。しかし、たったの50人かそこらの中でそういうアラフィフ世代の祖母が5人も集結する、という偶然が果たしてそうそうあるものだろうか？そうかと云って娘か嫁に付いて来たという風にも見えない……。

やっぱり母親なのかね……。そう僕は納得する事にした。四十路を大分過ぎてから子供を授かる人も結構いるらしいし、きっとそういう人なのだろう。

会議室の入り口から見て一番奥、後ろの方にある机に、偶聖華と凛様が並んで腰掛けていたので、そこにちゃっかりと仲間入りさせて貰う。

「ごきげんよう、凛様、聖華さん。」

「あら、ごきげんよう、薫。」

「おはよう、薫ちゃん。」

お互い適当に挨拶を交わすと、まだ始まるまで時間があった事も手伝って、まるで学生時代の時のように、僕達はお喋りに興じた。

しかし哀しいかな。止めど無く続く会話も、昔は化粧品とか服飾品とか恋愛とかそういう他愛のない話ばかりだったのに、今や家の

事とか仕事の不満等世俗臭い話題が多くを占めている。これが歳を取ったと云う事なのだろうか……。僕は何処か辛気臭い物を実感した。

確かに雑談に夢中になっていたものの、然程大きな声で話していた心算は全くないのだが、いつの間にかその場にいた殆どの女性が僕らの方を遠巻きに見つめていた。

そこまで五月蝿かったかしら？と思って3人とも沈黙すると、すぐ前の座席に座っていた同じ年頃だと思われる丸いレンズの眼鏡を掛けたセミロングの女性が此方へ振り向き、僕等に声を掛けてきた。

「あの、もしかして……。尾崎　凛様と龍宮司　聖華様と綾小路　薫様ですか？」

無論その通りなので、そうだと肯定する為に3人とも同じタイミングで首を縦に振ると、その場でどよめきが湧き起こった。そしてその代わり、僕以外の二人は澄ましながらも溜息を吐いている。僕はただ、何故周りがざわつき始めたのか検討が付かず、目を点にして辺りを見回していた。

今更知る事になったが、僕等が学生会で見習いや役員を任されていた頃。それまで会長や副会長を務めた歴代のお姉さま方のように、かなり多くの女生徒から憧れと畏れの対象として見られていたらしい。俄には信じられないが……。

まあ、僕個人の云々という事は絶対に無かろう。はるか昔に居ただろう皆から慕われたお姉様が、妹を選任する。憧れの人が推した人だからと右倣えしてその妹を支持する。そしてまた別の妹分がという風に最初の人の影響が時代を追って連綿と波及している、というのが実情だろう。要は運良く御零れに肖られただけである。

そうは言っても、当時の自分達に二つ名が付いていたとは知らなかった。それぞれお姉様は『天上の賢姫』、凛様は『淫靡な魔女』、聖華は『金翼の天使』、そして僕には『銀馬の騎士』という名前が、勿論本人達の知らぬ所で勝手に名付けられて蔓延していたらしい。

何だろう、自分が名乗っていた訳でも無いのに耳が痛いと云うか、まさに顔から火が出かけない事実である。まさか１５年も経ってから、自覚症状の無い中二病の後遺症のような古傷を抉られるとは夢にも思わなかった。地味にくる。

一頻り騒ぎが収まって平穏が取り戻されると、やっと年少組担当の教諭責任者を司会進行として保護者会が始まった。

「それでは、これより聖リリカル女学院付属幼稚舎、第１０８期園生保護者会を始めさせて頂きます。本日は父兄の皆様、お忙しいところ御足労頂き有難う御座います。進行は年少生教諭主任の橋本透が務めさせて頂きます……。」

まずは、幼稚園側と保護者側との意思の疎通を円滑に図るという観点からの保護者会の簡単な説明を始めとして、年に１７回もこのような集まりをして報告や会議を行う事、上方の伝達や話し合いを速やかに行う為に保護者会会長と以下５名の役員を父兄の中から選出する事、といった様な内容が司会の口から話され、５０人強の中からその貧乏籤を誰が引くのか互いの間で議論する事になった。

ウチのマンションの管理組合の役員の取り決めの時でもそうだが、こういう大した見返りもない割に過酷な業務が課せられる仕事の場合、先ず進んで引き受けようという勇者や猛者は出てこない。大抵、

「他に仕事があるから。」

とか、

「子供の世話が大変で……。」

とか、更によく解せない強引な理由を付けて面倒事を他人へ押し付け合う。

言うまでもなく、今この場にいるのは、何だかんだといって社会の中でそれなりの地位に就いている、またはそうした人の伴侶や家族としてそれ相応の良識と思慮と教養を持っている人が大部分なので、露骨な言動を取る事は決して無い。だが消極的であるという点

は同じだ。

結局、この手の流れではある意味テンプレと化している、当惑した司会が保護者達に自薦や他薦を只管連呼して促すという、不毛な展開になっていく。しかし、他薦も宜しいと言われても、まだ全員の素性が知れている訳ではない。たとえ知り合いがいても、大抵ママさんグループという、母親特有の一種の精神的なコミュニティーを形成しているという都合上、誰か一人を生贄に差し出すような真似は憚られる。能天気でいれば良かった学生時代とは違って、自分が挙手する事も乗り気になれないし、そうかと言って無責任に他人を引っ張り出すのも人間関係の上で難しい。大人の世界は大変なのだ。

ただそれでも、自分達の仲間意識の外にいて、かつ引っ張り込んでも本人がある程度なら承服しそうな雰囲気で、更に周囲の人間もその人が役員になる事に文句無しに納得する人物が居れば話は別だ。

「かお……いえ、富士之宮さん、龍宮司さん、長谷川さん達はどうかしら？」

そう誰かが呟いた言葉が引き金となって、いつの間にか僕等３人は役員に推薦され、音頭を取られていた。

面倒な事になったなあ、とうんざりしつつも、周りの目を考えると拒み辛い。それに僕は、外で働いているお母さん方と比較すれば、専業主婦で家に居る時間が多い分こういう事も出来る程度の余裕はある。いや、だからこそ推薦された以上、ゆとりのある自分が率先して保護者会の役員という大儀な役目を引き受けなければ、という使命感にも似た何かが僕の心の中で燃えていた。

だから、自分が衆目の的になった刹那、僕は反射的に右手を上げて起立していた。

「わかりましたわ。不束者で至らない所も多々あると存じますが、保護者会の役員、謹んで引き受けさせて頂きます。」

パラパラと疎らに湧き起こった拍手の音を聞きながら、再び僕は静かに着席した。

日本という風土に住んでいる人間の奇妙奇天烈な特徴の一つなのだろうか、あれ程遠慮して婉曲に拒んでいたにも関わらず、誰かが先陣を切った途端にそれに続く奴が出る。結局やる意志が少しでもあるのなら初めから挙手すれば何事もスムーズに行くと思うのだが……、と続々と役員が決まっていく様子を傍観しつつ、僕は内心で溜息を吐いた。

凛様と聖華を始めとして、自分も含めて5人の役員が名乗りを上げた所で、その中で会長、副会長、会計、書記、庶務を誰に割り振るのかを話し合う。因みに、役員を選抜する時点で、仕事をしている母親や父親は除外し、僕と同じ様な専業主婦しかいないので、どの役に当たっても、忙しいから無理、と言い訳して拒否する事は出来ない。

そんなこんなで話し合いが開始し、然程時を経ずして割りと楽な庶務と書記にそれぞれ田辺と山城という名前の４０前の主婦2名が就任する事が決まり、残りの3役を僕と聖華と凛様で割り当てる事になった。

「それじゃあ、会長は薫ちゃんに任せるという事でいいとして……。聖華、あなた副会長と会計のどっちがいい？」

「はい？」

唐突過ぎる凛様の発言に、僕は思わず目を白黒させた。

「どうしてわたしが会長なのですか？別に凛様でも……。」

「わたしは無理よ。旦那の選挙や広報の手伝いもしなければいけないもの。聖華だって龍宮司の令嬢として色々な付き合いがあるだろうし……。その点薫ちゃんは専業主婦だし、旦那さんは次男だから富士之宮の家のあれこれに顔を出す必要もないのでしょう？打って

付けでしょう？」
「うって……、まあ、そうですけれど……。」
凛様の発言で、僕は少し言葉に詰まってしまった。
「それに、真っ先に皆から名前が上がったんだから、薫ちゃんが保護者会会長に成らなきゃ、皆が納得しないでしょう？」
「うん、まあ……。う――ん……。」
そう言われるとますます断り辛い。仕方なく、僕は口を噤んだ。

「それにさ、年中さんの保護者会の会長は、確か麗子でしょう？」
「はい。」
「そういう意味でも、わたしはここの会長は薫ちゃんが良いと思うのよねえ。聖華、あなたもそう思うでしょう？」
凛様の言葉に同意するように首を縦に振った聖華を目の当たりにして驚いた僕は、両人の顔をまじまじと交互に見つめた。
「え？どうしてです？」
「だって、麗子って……。国内有数の財閥の御令嬢でセレブな奥様、才色兼備で容姿端麗、その上あの性格でしょう？普通の人なら取っ付き難くて敵わないわよ。それにここはウチ（聖リリカル女学院）のＯＧばかりだから余計にね。そういう意味では、麗子に一番親しくて、あの子に可愛がられている薫ちゃんがやっぱり適任って訳。」
そう断言すると、学生時代と同じ様に凛様は僕に向かって軽妙にウインクした。

結局、会計を凛様、副会長を聖華が務めるという事で決着した。

「ただいま！」
「ママ！おかえりなさい。」
「おかえり。随分遅かったな。」
「ごめんなさい。思ったより長引いちゃって……。」
当初予定していた時間より大分経過した、午後１３時半頃、やっ

と帰宅して居間に入ると、待ち草臥れたのか、少し機嫌が斜めな表情をした和樹と桜が僕を出迎えた。
「お昼はもう食べてしまって？」
「いや、まだだ。」
「ママ――！桜、お腹空いた！お腹空いた！」
「わかったわ。今から有り合わせの物で何か作るから、もう３０分位待っていて。」
「うん、わかった！桜、待ってる！」

スーツのジャケットとスカートそしてブラウスをフローリングの床に投げ付けるように脱ぎ捨て、ソファーの背もたれに掛けっ放しにしていた白い長袖のブラウスのようなワンピースを着てエプロンを身に着けると、キッチンに入って冷蔵庫の中を物色した。
人参や玉葱と云った野菜や卵といった普段から常備している食品の他に、何故かいつかの夕飯で使ったスライスベーコンが少し残っていたので、簡単な炒飯もどきを作る事にした。

俎板の上で三徳包丁を使ってベーコンや人参、そして玉葱等の具材を微塵切れに近い位細かく細切れにし、油を引いたフライパンの中に投入してＩＨクッキングヒーターのコンロの電気を入れ、ある程度熱が通った所でこれでもかという程大量の油と共に、水分少なめで炊いた御飯を投入し、塩を軽く掛けて出力最大で激しく炒める。
卵を3個割ってフライパンの中に投入し、更に塩胡椒を振り、檜の杓文字を駆使して全力で鍋の中身を掻き回していると、
「そう言えば、……で、……だ？」
と、和樹が僕に何か話し掛けてきたが、濛々とフライパンから換気扇へと拭き上げる多量の湯気が上げる音と、米が弾けるパチパチとした音の所為でよく聞こえなかった。
「え？何？もう一度言って！」
「何でこんなに遅くなったんだ？昼までには帰るって言っていただ

ろう？」
「保護者会の役員を決めたのだけれど、中々決まらなくてその分長引いてしまったのよ！」
「ふ――ん。」
「それでね、推薦されてしまって仕方なく引き受けたのだけれど、会長にもなってくれって凛様達にせがまれてしまって……。」
「ほお……。」
「だから、今日から暫くは保護者会の会長よ！」
「ふーん、そうか。……まあ、頑張れ！」
頑張れ、って随分素っ気無いなあ、と夫の見えない所で苦笑しつつも、
「まあ、頑張れって気遣ってくれるだけマシなのかしら……。」
と、僕は小さく独り言ちた。

第三話：実弟の来訪

＞＞薫

夕方、桜と共に幼稚舎から帰宅し、普段着へ着替えてリビングのソファーの上にちょこんと三角座りをしてアニメを視聴する娘を横目に見つつ、キッチンで夕飯の調理の準備をしていると、突然カウンター上の電話のプルルルルとけたたましい電子音が鳴り出した。

キッチンの中からシンクを跨ぐようにカウンターへと右手を伸ばし、親機の傍に置いた充電器上の子機を手に取った。

「もしもし、富士之宮でございます。」

「あ、兄貴？俺だよ、俺。孝。」

電話を掛けてきたのは、弟の孝だった。大学院を卒業してからそのまま向こうで就職し、現在も仙台に居を構えている。僕が知る限り27歳の今になっても、たぶんまだ独身の筈だ。たぶん、と茶を濁したのは、もう優に5年以上僕は彼と顔を見合わせて無ければ直接連絡を取っていなかったからだ。こうやって声を聞くのだって甚く久しぶりである。

「孝、あなたなの？久しぶりねえ！」

「うん、まあね……。」

気の所為か、孝の口調に何か歯切れの悪さを感じたが、まあ僕の気の所為だろう。

「それで、どうしたの？いきなり電話を掛けてくるなんて。」

「ああ、実はさ。今度出張で東京へ行く事になったんだけど……。兄貴の所に泊めてくれないかな？」

久々に連絡を寄越したから何事かと思えば、単なる宿代わりの申し入れかよ……。内心呆れて間髪を入れず断ってやろうか、とも思ったが何はともあれ血の繋がった実の弟である。

「そうねえ、ウチの客間が空いている事は空いているけれど……。夫に訊いてみないと。悪いけど、わたしの独断では決められないわ。」
「そうかあ……。じゃあ、お義兄さんに聞いてみて。ＯＫだったら俺の携帯に連絡してよ。」
「わかったわ。」

そう言って通話を終えようとした途端。受話器の向こうで、
「クスッ。」
と噴き出したような孝の笑い声が聞こえてきた。
「何？どうしたのよ。急に……。」
「いやあ、ごめん、ごめん。未だに慣れなくてさあ……。兄貴のそのお嬢様喋り。」
「あら、そんなに可笑しいかしら？」
「そりゃあ、可笑しいか可笑しくないかで言えば、そうじゃないけどさ……。やっぱり俺にとって兄貴は兄貴だから……。」
弟の声は、心なしか諦めと寂しさを奥底から滲み出しているように僕には感じられた。しかし、そのような陰鬱な感じはすぐに鳴りを潜め、元のような明るい調子に戻った。
「まあ、いいや。じゃあ、お義兄さんに宜しく。良い返事を期待しているから。」

電話が切れ、充電器に子機を戻す段になって初めて僕は気が付いた。弟がいつ此方へ来るのか、日取りを聴き忘れた。

深夜、桜を寝かしつけて暫く経った後和樹が帰宅すると、僕は早速夕刻あった弟からの電話の件を夫に話した。
「孝君が？」
「ええ、さっきも言った通り、泊めて欲しいのですって。……客間が空いているから、使って貰おうかと思っているのだけど、どうか

しら？」
「……別に良いんじゃないか。先方にそう伝えといてくれ。」
「分かりました。では、そう云う風にあの子にも伝えておきますわ。」
「うん。ところで……。孝君って、何時此方に来るの？」
「さあ？詳しい日日を聞く前に切ってしまったから……。明日掛けた時に聞いておきますわ。」
そう答えつつ、リビングにある低い方のテーブルの上、テレビと正面に向う和樹の前に僕は彼の分の夕飯を並べた。
「はい、あなた。どうぞ……。」
「ああ。……そう言えばさ。この家に来るの、孝君初めてじゃないか？」
「そうでもないですわよ。ほら、結婚式を上げる時に、京都の両親があなたの留守中に訪ねて来た、って話した事がありましたでしょう。あの時、お父さんとお母さんに引っ付いて来ていたから、多分場所は分かっていると思うわ。……でも、それ以来殆ど連絡を取っていないから、本当に久しぶりですわね。」
「そうか……。ん、そうだ！それじゃあ、孝君、桜の事を知らないんじゃないか？」
「それはないと思いますわ。京都の方から仙台の方に話しているでしょうから。この前、京都の方に桜の入園式の写真を送った時に、きっとお母さんあの子にも見せている筈でしょうし……。」
「そういうものか……。」
何だ、詰まらないな。そんな事が言いたげな顔をしてグラスに注いだビールを飲み干すと、和樹は僕に酌を求めた。

『ウチに泊まる件、快諾した。詳しい予定を知らせて下さい。』
そんな文面のメールを、彼から最初に電話があった翌朝に孝のスマートフォンのメールアドレスへ送信すると、その彼から昼頃に僕のスマートフォンへ折り返し電話が掛かってきた。

「もしもし、孝？」
「ああ。兄貴、例の件ありがとう。助かるよ。」
「それで、何時此方へ来るの？」
「来週の月曜から金曜まで。」
「あら、意外と長いのね。」
「そうなんだよ。短過ぎるから会社が滞在場所を確保してくれる訳じゃないし、１週間近くとなるとホテル代も馬鹿にならんしね。いや、ホント、助かったよ。」
「それはどうも致しまして。……ところで、孝。」
「何？兄貴。」
「ウチに泊めて上げるのは構わないけれど、幾つか条件を守ってくれないかしら。」
「……？別にいいけれど……。」
「約束出来る？」
「出来るって言っているだろ！兄貴。一体何なんだよ、条件って？」
「一つ。解っていると思うけれど、ウチには小さな子供が居るから、その心算で来る事。」
「ああ、そう言えば兄貴の子供……。ええっと、名前何だっけ？」
「桜よ。」
「そうそう、桜だった。……が幼稚園に入園したんだって？お袋から聞いたよ。おめでとう。」
「ありがとう。……兎に角、好奇心旺盛な幼稚園児が居るから、危ない物や貴重品の管理位はきちんとしてよ。」
「ああ、解った。気を付けるよ。……で、それだけ？」
「後、もう一つ。ウチにいる間は、絶対にわたしの事を『兄貴』と呼ばないで！」
「……？！」
「姉さん、ないし姉貴と呼びなさい。」
「え？！どうして？兄貴は兄貴だろう？何か問題があるの？」
「ありまくるから言っているのよ！もし桜が、わたしが昔男だった、

と云う事に感づいたらどうするの？」
「え？兄貴、教えてないの？」
「教えられる訳ないでしょう。少しは考えなさいよ。もしも、お母さんが急に、自分は昔男だった、なんて事を唐突にカミングアウトしたら、あなたどう思うのよ？」
「軽くトラウマになるわ！……あっ、成る程。そう云う事か。」
「そう、そういう事だから。少なくとも子供の前では言動に気を付けて頂戴。」
「分かった、分かった。……でも、いくら何でも気にし過ぎじゃないか？」
「あなたも、人の親になれば嫌でも解るわよ。少なくとも今は、わたしはあの娘にとって普通の母親でありたいの。」
「ふん、そういうものか……。じゃあ、姉さん。来週から宜しく。」
「ええ。そっちも気を付けてね。」
耳から携帯電話のスピーカーを離すと、僕はそっと画面に出て来た終話ボタンを軽くタッチして電話を切った。

月曜日、昼を大分過ぎてそろそろ日が西へ落ち始めた頃、買い物から帰って冷蔵庫の中を整理していると階下に我が家への客が来た事を伝えるインターフォンの電子音が鳴り出した。
「ハイハイ……。」
と掛け声を上げつつ冷蔵庫の扉を閉め、キッチンのシンク部分とリビングを隔てる壁に取り付けられた白い電話型のインターフォン画面を覗くと、大きな旅行用の紺色のスーツケースを手にした茶掛かったグレーのスーツ姿の若い男の顔が僕の目に入って来た。髪が短く刈られ、顔も少し面長で眼鏡のデザインも違う為に大分印象は異なるが、目鼻立ちは明らかに僕のそれとそっくりな彼は、間違いなく実弟の孝だった。

ピンポ――ン……！

玄関のチャイムが鳴るのを待ってからドアを開けると、先程下のカメラに写っていた弟がそのままの姿で僕の眼前に立っている。
「改めていらっしゃい、孝。久しぶりね。」
「兄貴こそ。」
「あ、スーツケースはここに置いておいて。後で拭いて部屋の前に置いておくから。」
「あ、ああ。分かった……。」
僕はスーツケースごと家の中へ入ろうとした孝を静止すると、下駄箱の反対側、客間の方と接する壁に添えるように彼にそれを立て掛けさせた。
そして、予め用意しておいた真新しい白いスリッパを孝の前に差し出すと、
「申し訳ないけれど、ウチに居る間は、お風呂場とトイレ以外はそのスリッパを履いて過ごして頂戴。」
とお願いした。
「おいおい、兄貴。兄貴が出した条件にそういうのは無かったと思うけど？」
「文句を言わないの。郷に入れば何とやらと云うでしょう？これが来客に対する我が家の流儀なのよ。それと、わたしの事を兄貴と云うのは止めて頂戴。」
「わかった……。」
弟のスーツケースのボディーやコロをウェットティッシュで拭いて上がり框へ上げながら文句を言うと、憮然としつつも孝は承諾した。

「ところで、早速だけど……。俺は何処を使えばいいの？」
家の中に上がってキョロキョロと左右を見渡すと、孝は玄関から見て右側にある洋間のドアのドアノブに手を掛けた。だから僕は咄嗟に、
「違う、そっちではないわ。こっち、こっち！」

と弟を制止し、廊下を挟んで向かい合った客間のドアを指差した。
「え？そっち？」
「そう、こっち。ここが我が家の所謂客間だから、自由に使って頂戴。ベッドの他に机と椅子もあるし、一応Ｗｉ－Ｆｉ環境も整っている筈だから特に支障はないと思うけれど、何か必要な事があったら声を掛けて頂戴。」
「ああ、分かった。……ところでそっちの部屋は何なの？今チラッと見たらあまり使っている形跡が見られなかったんだけど……。」
「ああ。あそこは将来、子供部屋として宛てがう為に態と空けているのよ。」
「ああ、そうなんだ。」
孝は、納得したようにそう頷いた。

ベッドと机しか無い客間にいつまでも居ても仕方がないので、孝と共にリビングへ移動する。ふと、ＤＶＤプレーヤーのデジタル表示の時計へ目を遣ると、それは結構な時間を示していた。
「じゃあ、孝。わたし、今から桜のお迎えに行かなくてはいけないから。あなたは適当にテレビでも見ながら寛いでいて頂戴。」

幼稚舎の建物の前に２０系レクサスＩＳ３５０の後期型を停めると、僕は桜を引き取る為に建物の中に入って行った。

「え－－－－ん！ママ、遅いよう！遅いよう！待ち草臥れたよ－－－！」
佐々木先生に手を引かれて現れた桜は、わんわんと泣き喚くとパシパシパシと僕の太腿をグーに握った両手で叩いた。全く……、早く来たらもっと友達と遊びたいと言うし、遅ければ遅いで文句をいうし、彼女はとんだ気分屋である。
「はいはい、ごめんね、桜。ママ、ちょっと用事があって中々来る事が出来なかったのよ。明日からはもう少し早く来られるようにす

るからね。」
「本当？」
「本当よ。さあ、帰りましょう。……それでは先生、今日も娘がお世話になりました。今日は、どんな風に過ごしていましたか？」
「いつも通り、とても良い子にされていましたよ。今日はですね……。」
そうして桜を宥めつつ、いつものように担任と雑談をして娘の幼稚園での様子を根掘り葉掘り聞き出すと、二人で先生と別れの挨拶を交わし、僕は娘と手を繋いで車へと引き返した。

「あれ？ママ――！テレビの音、してるよ――？」
家に着いて玄関のドアを開けると、開口一番この言葉が、僕のスカートの裾を持ってクイクイと引っ張る桜から発せられた。
普段家人が居ない時は必ず消してある筈のテレビの音が聞こえる事がそんなに気になったのだろうか。靴を脱がしてやると、制服を脱ぐのも忘れて桜はリビングへ向かって廊下をトテトテと走りだした。が、
「桜！下の家の人の迷惑になるから、家の中で走っては駄目だって言っているでしょう？」
と注意すると、途端に桜は立ち止まって僕の方へ振り向き、トコトコと歩き出すのだから可愛いものだ。兎も角、桜はそのままドアを開けてリビングの中へ入って行った。

「あれ？おじさん、だあれ？」
そんな娘の愛らしい声を聞いて、僕も静かにリビングの中に入ると、目を白黒させてその場で立ち尽くし、ソファーの方を凝視する桜と、そのソファーにどかっと腰を下ろし、驚いたように自分を見つめる子供の方へ振り向き、怪訝そうに見つめる孝の姿が僕の目の中に飛び込んで来た。

そのまま見守っているのもそれはそれで一興だと思ったが、それは少し可哀想なので、僕は両者の間に割って入った。
「ただいま。孝。」
孝は驚いたように僕と桜の顔を交互に見比べていたが、やがて納得したように、
「ああ！」
と息を吐くと僕の顔を見据えた。
「この子があに、いや姉貴の……。へえ……！」
「何だと思ったのよ？ウチには子供は1人しか居ないわよ。」
「え、いや……。あん……姉貴が餓鬼になって戻って来たと思って些か吃驚してしまってさ……。」
「何言っているのよ。やあね……。」
思わずクスクスと笑い声を漏らして僕が揶揄って窘めると、孝は真顔で首を横に振った。
「いや、生き写しとか、そういうレベルじゃなくそっくりだぜ。」
「適当な事を言わないの。わたしがこの娘位の時って、あんたが生まれたか生まれてないか、な頃でしょう？」
「勘だよ、勘。確かに覚えて無いかもしれないけど、何年兄弟をやっていると思うんだよ？……でも本当に良く似ているなあ。しょっちゅう言われるんじゃないの？」
「まあ、お父さんとお母さんや葵お姉ちゃんとかにはよく言われるわね……。」
そりゃあ、ＤＮＡの構成上、ほぼ自分のクローンのような者なのだから似ていて当然だろう。そう思いつつ僕は頷いた。
唐突に立ち上がると、孝は僕の耳元に近付き、蚊の鳴くような声でこう囁いた。
「なあ、兄貴……。」
「何よ？その言い方は止めて頂戴と何度も言っているでしょう？」
僕も孝に耳打ち返す。

「うっかり桜に聞こえたらどうするの？ウチの家を滅茶苦茶にする心算？」
「そんな大げさな……。というか、別に兄貴でいいんじゃない？姉貴とか、姉さんとか……、やっぱ違和感が拭えないんだよ。」
「もう１５年も女として生きているのよ。いい加減馴れなさいよ。」
「その１５年の内、通算何年顔を会わせた事があると思っているんだよ！兄貴は基本東京にいて長期休暇位にしか帰って来ないし、結婚してからは最近まで殆ど実家に帰らなかったろう？俺の中では、圧倒的に長い分、今でも兄貴は男なんだよ。」
「孝、あなたの中ではそうなのでしょう。あなたの中ではね。……でも、わたしはもう籍を変えてもう１０年以上になるし、世間的にもわたしの中でも、もう女性という事になっているのだから……。」
「いや、だけど……。」

何か反論しようとした孝を態と無視して彼から顔を背けると、僕は足元にいる桜の方へ視線をそっと落とした。
「それに、もうわたしはこの子の母親として一生を生きていく事に決めたの。だからね、孝、お願い。軽はずみな言動でこの娘の自我とわたしの幸せをぶち壊すような真似はしないで頂戴。これ以上『兄貴』だなんて言葉を使ったら、問答無用で家から叩き出すわよ！」
そう言い放って議論を収束しようとしたが、却って孝は荒々しい調子でこう囁いた。
「でもさ、結局それってあ……ねき、の勝手な都合じゃないのか？」
「……。」
「まだこの子の年齢なら、多少俺が口を滑ったところで理解出来ないだろうし……。理解できる歳になったら事情を話して、じっくり時間を掛けて受け入れさせれば済む事だろう？」
「わたしはね、孝。この娘に、普通の父親と、普通の母親を持った、極普通に幸せな暮らしをさせて上げたいの。本人の性質なら兎も角、この子にとってマイナスとなる環境要因は出来るだけ排除したいし、

隠したいのよ。あなたの言う通り、わたしのエゴに過ぎない物だとしても、その事で桜が悩まないで済むのなら、それで結構！あなたに一々文句を言われる筋合いはないわ。兎に角、わたしの事を『兄貴』とか『兄さん』と呼ばない。桜にわたしが男だった事を漏らさない。それだけを守ってくれればいいの！わかった？」

「……。」

孝は、納得がいかない！と言いたげに僕を睨めつけたが、何も言わなかった。

ふと、誰かにスカートの裾を掴まれた感覚を覚え、自分の左の太腿の方に視線を移すと、不満そうに口を真一文字に結んで眉をハの字にした桜とばっちり目が合った。

「ねえ、ママ――。」

「……。」

「そのおじさん、だあれ？さっきから、何を内緒話しているの？ねえ、ねえ！」

ああ、そうだ。すっかり失念していた。桜は今日、初めて孝に会ったという事を。

僕は桜の目線の高さまでしゃがみ込むと、娘に向かってこう語り掛けた。

「このおじさんはね、孝叔父さん。前に京都のお祖父ちゃんお祖母ちゃんの家で話した事があったでしょう？ママの弟なの。」

「ふ――――ん。」

桜はそう言うと、疑わしそうな目でじっと孝を舐めるように見つめた。その視線にたじたじとなったのか、彼が少しキョドっているように僕には感じられた。

「ああ、俺が孝叔父さんだよ。こんにちは、桜ちゃん。」

「こんにちは。」

桜は、至極無邪気に挨拶を返した。

「いやあ、孝君、よく来たなあ。まあ、今夜はゆっくりして行け。」
「ええ、お義兄さん。暫く厄介になります。」
「まあ、そう固くなるなって。さあ、飲め！飲め！」
珍しく夕飯前という早い時間に帰って来た和樹は、スーツから普段着に着替えると書斎にある棚からスコッチの酒瓶を、台所にある食器棚からグラスを2個取り出すとテレビの前のテーブルの上にどかっと並べた。そして隣に孝を招き寄せるとコップの一つを手渡し、酒を勧めた。
「はあ、頂きます。」
「ところで、孝君はこの手の酒はどういう飲み方が好みなんだい？ロック？チェイサー？それとも普通の水割りか……。」
「すみません、ストレートでも良いですか？」
「お！さてはいける口か？解っているじゃないか！」
上機嫌な和樹は、孝が手を添えたグラスに少しだけウイスキーを注いだ。
そして孝に自分のコップに注がせると、
「おーい！薫。飯はまだか？」
と、台所で夕飯を盛り付けている僕に向かって叫んだ。
「今持ってきますから。少し待って下さい！」
「早くしてくれよ。……それじゃあ、孝君。乾杯といこうか！」

少しでも早く御飯にしようと頑張っているのは一目瞭然だろうに、急かすなよ。というか、勝手に酒盛りを始めて盛り上がっているな！そう苦々しく感じつつ少し乱暴に、僕は炊飯器の白米を夫の茶碗と男の客人用のそれに装った。
ゴツンッ！ガチャッ！バタッ！ポンポンポン！
陶器や硝子が互いに軽く接触する甲高い音を立てつつ、叩くようにテーブルの上に食器を乱雑に並べていく。

「……っ？！何だよ？」
と、まるで酒が不味くなると文句を言いたげに和樹が僕を睨んだが、
「いいえ、何もありませんわ、あなた。さあ、御飯を食べましょう。どうぞ召し上がって下さい。」
と柳に風と受け流す。

冷蔵庫の扉に磁石でくっ付けたプラスチックの白い小型ラックの中から青い綿の正方形の鍋敷きを取り出してテーブルの上に敷く。台所へと踵を返し、同じラックから鍋敷きと同じ柄の鍋掴みを２つ出して両手に装着すると、僕はグツグツと煮えたおでんの入った土鍋を掴み、ＩＨクッキングヒーターの上から鍋敷きの上へと慎重に、だが素早く移動させた。
「はい、おでんが出来ましたわよ。」
「おお――！」
鍋掴みをラックへ仕舞い、襖を背にして娘と共にテーブルの傍のクッションの上に腰を下ろす。
「それでは……。」
「頂きます！」
皆で一勢にその言葉を口にすると、僕達は各々取り箸を手に取り、鍋の中の物を突付き始めた。
桜の取り皿におでんの具を放り込む時に、他は自分も含めて１つずつのところを、特別に白くてふっくらとしたお餅を油揚げに包んだ餅巾着を２個入れて上げる。
「桜は、お餅が大好きだから、２個位は食べるわよね？」
「うん！桜、これ大好き！」
桜はそう言って箸を手に取ると、真っ先に餅巾着を摘み上げ、そのままそれにぱくついた。

僕と桜を余所に、男二人は盃を交わしつつ話に花を咲かせていた。
「そう言えば、孝君は今年幾つになるんだい？たしか薫の３つ程下

だったと思うが……。そうすると……、27か？」
「ええ……。」
「じゃあ、そろそろ将来を誓い合った仲、な人の1人や2人居るんじゃないか？」
酒が進めばこういう一歩も二歩も踏み込んだ話に発展する事だって多々あるものだ。たじろぐ孝を揶揄するように、和樹はニヤニヤと笑ってその様子を伺っていた。そして僕も、弟には弟の人生があるのだから彼の好きなようにすれば良い、と思いながらも自分もある程度は関わる人であろう事から、好奇を持って弟の方を注視した。

孝は箸を止め、グラスまでもテーブルの上に置いて後頭部をボリボリと右手で掻くと、頬を赤く染めて照れながら口を開けた。
「いやあ、まだそうと決まった訳じゃないけど……。ここだけの話、そうなったらいいなというか、一応今付き合っている人なら……。」
「おお――――！」
意外な答えに、話について行けず首を傾げている桜を除いて、僕達は思わず歓声を上げた。単に秘密にしていただけかもしれないが、父や母からも孝の色のある浮ついた話は一切聞いた覚えが無かったので、大丈夫かな、と僕自身は少々気に掛けて居たのだが、どうやら無用の心配だったようである。

「あ、でも。これ、内緒にしておいて下さいよ。特に『姉貴』、親父とお袋には絶対に喋らないでくれよ！」
安心しろ、弟よ。僕はお前が思うような口の軽い女ではない。それと、いい加減僕を姉貴と呼ぶ事に早く慣れるのだ。

なんだかんだとあっという間に5日間が経過し、とうとう孝が我が家を去る日が訪れた。
金曜日の夕刻、まだ日が高い早い時間帯に戻って来た孝は、早々客室へ入ると、事前に纏めていた荷物を整理し始める。

「本当にもう帰るの？どうせ明日はお休みなんだから、今夜もウチで泊まって、明日朝一の新幹線か飛行機に乗ればいいのに……。」
そう引き止めたが、弟は僕に向かって首を横に振った。
「悪いな、兄貴。でも、もう今夜の博多行きの新幹線で立つ心算なんだ。」
「博多？孝、あなた仙台へ戻るのではないの？」
「この週末に、序いでに親父とお袋の所にも顔を出しておこうと思ってね。ほら、正月とか戻れなかったからさ。」

スーツケースをバタンと閉め、青いゴム布のベルトをグルリと巻きつけて起こすと、孝は徐に立ち上がった。
「じゃあ、兄貴。俺、もうそろそろ行くわ。お世話になりました。」
「あ！ちょっと待って！孝。」
僕も慌てて腰を上げた。
「吉祥寺の駅まででいいなら、送って行くわ。」
「いや、兄貴、いいって！そんな……。」
「嫌ねえ。そんな事言わずにさせてよ。また暫く顔を見ない事になるんだから……。」
「……。」
「じゃあ、決まりね！待っていて、すぐに用意をするから。」
そう孝へ言い残すと、僕は客間のドアを開けて廊下に出た。

リビングに入ってソファーの背凭れに掛けた外出着を手に取って着替えつつ、同じくソファーの背凭れに寄り掛かるようにしてアーちゃんと遊んでいる桜に僕は声を掛けた。
「桜！」
「なあに？ママ。」
桜が振り向いた。
「ママ、これから孝叔父さんを駅まで見送りに少し出掛けるから、いい子で留守番していてね。すぐ帰って来るから。」

そう言ってハンドバッグを片手に出発しようとすると、不満そうに口先を尖らせて桜が叫んだ。
「桜も行く――――っ！ママと一緒に行く――――っ！行くの――っ！」
「分かった！分かったから、ね。」
一度喚き始めたら、もう誰にも止められない。僕は渋々承諾すると、すぐ隣の和室に入って押入れの中の半透明の衣装ケースから白い靴下を取り出すと桜に渡した。
「はい、靴下を履きましょうね。」
「は――――い！」

そうして桜を抱いて客間に引き返した。
「ごめんなさい、孝。」
「……？どうしたのさ？」
「桜がどうしても一緒にあなたを見送りたいって言うから、連れて行っても構わないかしら？」
「え？俺は別に構わないよ。」
「良かった……。じゃあ、そろそろ行きましょうか。」

玄関の扉を施錠し、３人でエレベーターホールへ向かって筐体が上階から降りて来るのを待つ。
到着した箱の中には、既に先客がいた。上の階……たしか最上階の７階だったろうか……に住んでいる澤という家の４０手前の奥さんである。途中の階で止まった所為だろう、怪訝そうに此方に目を向けていたが、待ち人が僕らである事に気付くや否や彼女は表情を和らげた。
「あら、富士之宮さん。」
「こんばんは。澤さん。」
「こんばんは――！」
副理事を経験した事がある位、マンションの理事会の活動に関わ

っている為、僕はマンションの他の住人の顔と名前は一応把握しているし、また逆に周りの住人にも覚えられている。
「こんばんは。家族でお出掛けですか？……あら？！」
当然家族構成だって知られているから、僕と桜と来て和樹が現れず孝が出現したこういう場合、澤夫人が目を丸くするのも無理はない。
「ああ！これ、わたしの弟なんです。丁度仕事で此方に出てきていて、今から送って行く所なのです。」
「どうも……。」
僕が説明し、弟が軽く頭を下げると、澤さんは納得したように頷き、
「まあ！そうだったの？……あら、嫌だわ。わたしったらつい……。オホホホ……。」
と苦笑した。
一瞬虚を突かれたが、彼女が何を言わんかした事に思い至ると、僕も釣られて笑ってしまった。
「嫌ですわ、奥様。わたし、そんなふしだらな事、致しませんわ。」
「そうだわよね。まさか子供の居る前で、そんな……。ねえ？」
そうして澤家の奥さんと一頻り笑い合う内に、エレベーターは1階に到着し、チーンという電子音と共に自動扉が開いた。
「それじゃあ、わたしはこれで……。」
「ええ、こちらも失礼します。」
澤さんが出た後、僕達もエントランスへと足を踏み出した。
エントランスを外へ向かって歩いていると、孝が間抜けな面をして僕にこう尋ねた。
「なあ、さっきの人といい、姉貴といい。何で笑っていたんだ？何かおかしな事でもあった？」
「馬鹿ねえ。あなた、間男と勘違いされていたのよ！」
と、思わず僕は弟の右肩をペシペシと右手で軽く叩いてしまった。
それでもまだ解らなかったのか、解った上でも腑に落ちなかった

のか、孝は首を捻っていた。

桜を左側の後部座席に座らせてシートベルトを締めさせ、ドアを閉めて運転席に回り込んでＹ３３シーマの後期型に乗車すると、僕は自分もそうしつつ隣の助手席でシートベルトに手を掛けた孝に話し掛けた。

「孝、何時頃の新幹線に乗る心算なの？」

「７時位ならどうかなあ、とは考えているんだけれどね。」

「また……、随分と大雑把ね……。」

シートベルトを締めてエンジンを掛けながら、僕は呆れてしまった。

「まだ切符を買ってないんだよ。取り敢えず駅に着いてから適当に決めるさ。」

発車措置をし、ヘッドライトとフォグランプを点け、ハンドルを左へ回しながらゆっくりと車を発進させる。

「そう言えば、あ……ねきは、まだこんな車に乗っていたんだね。」

と、孝が左の拳で助手席側のＡピラーを叩いた。

「あら、まだこんな車に乗っていたらいけないかしら？」

「いやあ、いけないって訳じゃないけどさあ……。」

と、弟は口を濁した。

「……こんな車じゃ、子供とか連れて回る時に大変なんじゃないの？」

「そんな事ないわよ。だって孝。お父さんだって、わたし達が小さい頃からずっとゼダンに乗っていたじゃない。別に大変って事はないわよ。」

「そりゃあ、そうか……。」

車はマンションの敷地と大通りが面する歩道の手前で一時停車した。帰宅ラッシュにかち合った所為か、片道２車線の道路は左右か

ら引っ切り無しに車が走って来る。
左ウインカーを焚いてタイミングを図っていると、
「吉祥寺の駅って此方なの？」
と、孝が彼の左側を指さした。
「ええ、そうよ。」
僕は右側の方へ顔を向けながら答えた。
「そっちからも行けない事はないけど、圧倒的に此方へ曲がった方が早いわね。」
その時、車に乗ってから黙っていた桜が、急に話に飛び入り参加した。
「右に行ったら、桜の幼稚園だよ！」
「そうね、そっちに行けば幼稚園ね。」
「そう言えば……、姉貴。桜が通っている幼稚園って、あに……いや、姉貴が行っていた聖何とかの系列校だっけ？」
車の流れが途切れたので、孝の言葉を聞きつつ僕はステアリングを左へ切ってアクセルを踏み込んだ。
「ええ……。系列というか付属校ね。」
ハンドルを真っ直ぐに戻し、加速しつつ道路を走る車の流れに乗る。
「でも、それがどうしたの？」
「いや、ちょっと気になっただけ……。」
「そう……。」

前を走っているライトエースのトラックの尾灯と制動灯が眩しいばかりに赤く輝いたので僕はブレーキを少し強めに踏み込んだ。少し先にある右折レーンに入って次の交差点を右に行けば駅へ続く吉祥寺通りへ入る。
「あと、１０分位ってとこかしら……。」
少し緊張感から開放されて生き抜くように溜息を吐く。

「そう言えばさ。この辺ってどうなの？」
まだ信号待ちで停まっていると、唐突に孝が僕に話し掛けた。
「どうって？急にどうしたのよ？」
「いやさ、この前職場で、あに……、姉貴が東京に住んでいるという話になってさ……。」
「何でそんな話になったのよ？」
「まあ、そこは置いといてさ。」
「いや、気になるじゃない。」
信号が青に変わったのか、前にいるライトエースのテールライトの灯りが消え、徐に動き出したので、僕もブレーキから足を離し、徐々に加速すると右ウインカーを点滅させて右折レーンに入り、交差点の真ん中よりやや手前に停車した。
「みんな都会に憧れているんだよ。」
「そうかも知れないけど、孝。仙台だって結構大きな街でしょう？」
「そうは言っても、やっぱり東京には敵わないよ。なんだかんだいって今でもこの国の中心だからねえ。本社に栄転が出来るなら、そうしたい、って皆が思っているさ。」
「そういうものかしら……。」
信号がゆっくりと青から黄、赤へ変わって往来していた車の流れがピタリと止み、信号機の赤色電球の下におまけのように取り付けられた右折の矢印信号が青く点灯する。ブレーキを緩めて徐行しながら、更に大きな道路へと僕は車を進ませた。
「そういうものだよ。……それで家族が結婚して吉祥寺に居を構えたって話をしたら、羨ましいっていう娘がいてさ……。実際の所どうなのさ？住み心地は。」
「悪く無いわよ。」
駐車車両を避けるために一番左の車線から隣の真ん中のレーンへ車線変更をしつつ僕は答えた。
「大きなスーパーも、商店街も、ヨドバシも、百貨店もあるし、駅や首都高速だって結構近いしね。別に街の外に出なくても十分だけ

ど、都心や横浜へ出易いのは、暮らしていて良いと思うわ。桜の幼稚園だって近いしね。」
「でも、幼稚園は兎も角、そう云う場所なら東京ならいくらもあるだろうし、便利さで言えば２３区内の方が良いんじゃないか？」
「そうねえ。でも案外こういう所の方が住み易いわよ。都会過ぎてなくて、丘陵地帯だからそれなりに自然もあって……。学校だって多いしね。」
「成る程……。」
窓の外へ目を向けながら孝は呟いた。
「確かに、そういう意味では暮らし易いんだろうな。……だからか。」

もうまもなくで駅周辺に着く、という辺りまで来た。
「えっと、駅に一番近い駐車場は……、何処だったかしら？」
吉祥寺の駅には駐車場が無い為、車を降りて改札かホームまで孝を見送ろうとすると、付近にあるコインパーキングに車を置いておかなければならない。普段から和樹を送る為に通っているとは云え、バスターミナルで一時停止して放り投げる程度だから、どの辺りに駐車場があるのかよくは知らない。
そんな僕の独り言が聞こえたのか、
「え、何で駐車場に車を駐める必要があるのさ？」
と、孝が訊いてきた。
「え、だってそうしないと、あなたを見送れないじゃない。」
すると、孝は右の掌を扇子でも煽ぐかのようにパタパタと左右に振ると、こう言い返した。
「いいって、いいって、そんな見送らなくても。駅の入り口の前で降ろしてくれればいいからさ。」
「で……、でも……。」
駅前の交差点に接近し、中央口のバスロータリーが朧気に見えてくる。

「本当いいからさ。これからみどりの窓口に行って切符も取ってこなきゃ行けないし……。兄貴も家の事があるだろう？……痛っ！」
「……わかったわ。じゃあ、あそこで降ろすから。」
弟の右の二の腕から、その腕を抓っていた自分の左手を離しながら、僕は彼の求めに応じた。

駅前のロータリーにて、丁度左手正面に中央口が望める場所に車を停め、ハザードを点滅させた。
「本当に此処でいいの？」
シートベルトを外したりして降車する準備をする孝に向かって呼び掛けると、
「言っただろう。此処でいいって。……じゃあ、姉貴、そろそろ行くわ。送ってくれてありがとう。……それじゃあね、桜ちゃん。」
と、彼は助手席のドアを開けて左足を地面に下ろした。
「じゃあね、気を付けて。向こうに着いたら、お父さんとお母さんに宜しくね！」
「ああ、伝えとく。」
「叔父ちゃん、バイバイ！」
「バイバイ、桜ちゃん。」
そう言い残して下車し、扉を閉めると、孝は僕らに背を向けて駅の中へと消えていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3915y/

幼稚園日記！

2011年12月13日08時48分発行